俳優論

〝映画俳優〟ハナ肇

西松　優
日本映画研究者

「ハナ肇を追いかけて」（文芸社）というハナ肇の映画俳優論・評伝を今年出版した。生誕九十年を迎えるハナ肇を、映画俳優としてもう一度多くの人たちに〝再発見〟してほしかったからである。ハナ肇の主演映画は、植木等主演の東宝「クレージー映画」のように大ヒットしなかったためか、意外に知られていない。

ハナ肇は百二十本超の映画に出演し、三十本以上の映画で主演あるいは主演に近い役柄を演じてきた。また、亡くなった翌年の一九九四年の日本アカデミー賞ではマキノ雅広、笠智衆らと共に日本映画界への功績が認められ会長特別賞を受賞している。彼はれっきとした映画俳優なのである。

主演では、山田洋次をはじめ、川島雄三、増村保造、野村芳太郎、森崎東、市川準などの監督作品に出演し、助演でも五所平之助、市川崑、新藤兼人、岡本喜八、深作欣二、黒木和雄、大林宣彦、神山征二郎、阪本順治など錚々たる監督の下で演じている。

そこでハナ肇が主演した映画の中で、特に印象に残る作品を年代順にご紹介したい。

『イチかバチか』（一九六三年・川島雄三監督・東宝）

この作品は『洲崎パラダイス赤信号』や『幕末太陽傳』、『しとやかな獣』などで有名な川島雄三監督の遺作である。鉄鋼会社社長 島（伴淳三郎）が大工場を作るという情報を

いち早く察知した東三市長大田原（ハナ肇）が誘致活動に乗り出し、市会議員松永など誘致反対派の市長リコール運動も絡んで、島がどう建設地を決着させるかがこの映画の焦点である。

大田原は押しが強く口八丁手八丁の田舎市長で詐欺師のように見え、彼は市を思う誠実な人間か、女好きで私利私欲にまみれた男なのかは隠され、その謎解きがこの映画の大きなテーマになっている。ハナ肇はこのバイタリティに溢れローカル色一杯の市長役になり切って演じている。脚本が菊島隆三なので、人物造形に深みがありハナ肇の田舎市長ぶりがリアルである。単純で、人なつっこいハナ肇の持ち味は封印され、恥もいとわず猛進して相手を取り込んでいく一方、懐深く多少のことでは動じない今までにない役柄を好演している。画面を見ていると川島監督のハナ肇への厳しい演技指導が伝わって来るようだ。伴淳三郎の個性が光り、高島忠夫は爽やかで、そして団令子が魅力的だ。

ハナ肇には映画俳優として、山田洋次監督との運命的な出会いと別れがあった。これが、ハナ肇の映画俳優人生を決定づけた。ここで山田洋次監督の三本のハナ肇主演映画をご紹介したい。

『馬鹿まるだし』（一九六四年・山田洋次監督・松竹）

この映画は山田洋次監督の喜劇映画第一作であり、ハナ肇にとっては初の単独主演作という二人にとって記念すべき作品である。この映画のヒットがその後のコンビ七作に繋がっていった。また、映画『男はつらいよ』は、この喜劇映画の成功なくしては誕生しなかったのではないか・・・。

この映画では、単純で気のいい流れ者安五郎（ハナ肇）が町の有力者におだてられ利用された上、時代の変化に適応できず破滅の人生を送るのが縦糸となっている。一方、「無法松」のように結ばれることのないお寺の嫁夏子（桑野みゆき）への無償の愛が横糸で繋がっており、「笑いの中に一筋の哀しみを込めた」山田流喜劇映画である。盲目の安五郎が二度と会えない夏子に田舎芝居の無法松のセリフを借りて愛を語るシーンは素晴らしく、ハナ肇がすっぽりとその役にはまり込んでいる。ハナ肇の映画俳優開眼の一作だ。

安五郎を利用した町の連中が、落ち目になると見向きもしなくなったり、安五郎が失明してまで救いだした女性は後に安五郎の死を知っても覚えてもおらず、庶民の薄情さを諷刺する。

賃上げ成功で労働組合員たちが労働歌を合唱しだすと、英雄扱いの安五郎が「人生劇場」を一人歌うが、全員がつられて赤旗を振りながら「人生劇場」を歌う様は切り返しが効いて何とも面白い。労働争議で安五郎に花を持たせた会社の会長（小沢栄太郎）は、深謀遠慮をめぐらし、町議会に手を回し会社が支援する町長候補を当選させ、旧勢力を駆逐し、その結果単純で軽率短慮な安五郎は落ちぶれていく。深謀遠慮と軽率短慮の好対照だ。

植木等が盟友ハナ肇のために映画出演を希望したが東宝専属のため許可されず、苦肉の策で、ノンクレジットでナレーションを担当した。これが映画とマッチし好評で、その後の山田映画によく使われるようになった。

『運が良けりゃ』（一九六六年・山田洋次監督・松竹）

この映画は、山田洋次監督の初の時代劇映画である。

物語は江戸天明不況の頃、貧乏長屋で暮らす熊五郎（ハナ肇）、妹せい（倍賞千恵子）、相棒の八（犬塚弘）を中心に、長屋で起きる騒動記だが、季節ごとにオムニバス形式で話が展開する。

熊五郎はお人好しで働き者だが、ばくちと酒が大好きな無鉄砲な人物で、劇中多くの騒動を巻き起こす。豪遊後の金の踏み倒し、妹の大名側室話のぶち壊し、家主へ仕返しのための火事騒ぎ、長屋取り壊し撤回のための死人のかっぽれ踊りなど。熊五郎が、長屋の住民のために良かれと思い知恵を出し、リーダーとなり、責任を負いながらグイグイ引っ張っていくのである。まるでその姿勢は、メンバー思いのクレージーキャッツのリーダーハナ肇をデフォルメして間近で見ているようだ。

ハナ肇・犬塚弘コンビが、硬さも見せず、水を得た魚のように生き生きと演じている。劇中の軽快なテンポと明るい雰囲気、芝居の隙間をタイミングよく埋める山本直純の音楽、喜劇人たちの絶妙な演技など、山田監督は貧乏長屋でしぶとく生きる人たちをやさしい眼差しで、明るいタッチで描いて見せた。

小心者の桜井センリ、馬鹿な若旦那の砂塚秀夫の演技がきらりと光る。オムニバス形式のため、映画全体で大きな起伏がないのが惜しいが、楽しい映画である。

『なつかしい風来坊』

（一九六六年・山田洋次監督・松竹）

この映画は、厚生技官 早乙女（有島一郎）と土木作業員源五郎（ハナ肇）との友情物語である。二人は親しくなり、早乙女は源五郎が助けた愛子（倍賞千恵子）との仲を取り持とうとするが、誤解から三人は疎遠になる。その後、左遷され早乙女は暗い気持ちで一人列車に乗るが、そこで出会ったのは・・・、というストーリーである。

この作品は、人間のふれあいや心の機微を繊細に織り込んだ喜劇映画である。この映画は何と言っても時代設定、人物設定が上手い。当時徐々に浸透してきたマイホーム主義や家庭内の夫権・父権喪失、官僚の縦社会構造を巧みに取り込み諷刺している。一方、建前社会で生きる小心者でうだつのあがらぬ厚生官僚を有島一郎が、本音で生きるがさつだが人のよい土木作業員をハナ肇が演じ、異質な演技者二人が相乗作用で好演している。

有島の演技が素晴らしく彼の代表作と言っていい作品だが、それはハナ肇が有島の演技をしっかり受け止めているからだろう。

序盤の酔った二人が風呂で徐々に打ち解けていくシーンは、水と油が自然に溶け合うような描写で私は好きだ。

しかし、見どころは何といってもラストの列車での再会シーンだろう。単身で遠い任地に赴く列車の中で早乙女は乳飲み子を抱いた愛子と再会し、そして源五郎を見つける。早乙女の心が、大雨（遠地単身赴任の落胆）→薄曇り（愛子との遭遇）→晴れ（源五郎・愛子の結婚を知る）→快晴（源五郎夫婦との談笑）と移り変わる様を、ハナ肇の受けの演技に支えられて、名優有島は最高の演技を出し切っている。私はこのシーンを何度見ても感動し、心が動く。

山田監督は、この映画で初めてラストシーンを大きな感動で終わらせている。そしてこの感動的な終わり方は、『幸せの黄色いハンカチ』、『遥かなる山の呼び声』等に引き継がれていった。

ブルーリボン賞主演男優賞・監督賞と、喜劇映画が二冠を達成し、それまで格下扱いされていた喜劇映画の評価を一気に高めた画期的な映画である。

そして最後に、〝映画俳優〟ハナ肇の集大成映画であるこの作品をご紹介したい。

『会社物語　MEMORIES OF YOU』

（一九八八年・市川準監督・松竹）

実は、私はこの映画があまり好きではない。その理由は、ラストがハッピーエンドでなく、見終わるとモヤモヤ感が残るからだ。しかしここで挙げた理由は、ハナ肇が名実ともに映画俳優として脱皮した映画だからだ。そして、ハナ肇最後の主演映画であり、クレージーキャッツ最後の総出演映画だからである。

市川準監督はＣＭ畑の異業種監督で、大のクレージーキャッツファンであり、彼の事務所が製作に加わるほどこの映画に力を入れていた。

定年間近の出世に無縁だった花岡始（ハナ肇）は、会社内のジャズ演奏経験者たち（クレージーキャッツメンバー）から、ジャズ演奏を持ちかけられる。昔の情熱を蘇らせ、退職当日に開かれたお別れコンサートでは、一騒動あるが、演奏しきって満足し会社を去る、というのが映画のあらすじである。

ＯＬたちの休憩時のおしゃべり、部下たちが上司を囲み機嫌を取るゴルフ談義等〝会社村〟の光景を短いカットをつないで巧みに映しだす。

会社では地位が低い守衛だが金持ちで若い綺麗な妻を持ち生き生き暮らす上木原（植木等）と、会社と家庭に縛られ生気なく生きる花岡とは対照的だ。長い会社生活で夢や希望は破れ、意欲なく無反応な課長役をハナ肇は好演している。視点の定まらないぼんやりした目、とぼとぼと背を丸めて歩く姿は本当に板に付いている。彼は人がよく猪突猛進型の役柄を得意としてきたが、ここでは無口で表情と姿だけでみせる一人芝居を見事に演じ切っている。

この映画の中で、市川監督は「自分がいなくても会社は明日も続いていく」と、サラリーマンという悲しい存在を喝破している。

一方、植木等が劇中「今の日本俺たちが作ったんだ」と叫び、皆がうなずくが、これは彼らの世代が今までやってきたことを総括する別れの雄たけびだ。クレージーの面々の居酒屋での談笑や演奏シーンは本当に楽しそうだった。

ハナ肇はこの映画で、ブルーリボン賞主演男優賞、日本アカデミー賞主演男優賞などを受賞した。

以上、私のお気に入りのハナ肇主演映画である。皆さんにご覧になっていただけますと幸いです。『イチかバチか』以外は、ＤＶＤ発売中です。